

〈論 文〉

北海道同志教育会(学田農場)と遠軽教会におけるキリスト教的開拓者精神

白 井 暢 明

Christian pioneer spirit in “Hokkaido Doshikyoikukai” (Farm “Gakuden”) and Engaru Church

Nobuaki SHIRAI

“Hokkaido Doshikyoikukai” (Farm “Gakuden”) was a group organized by two Christians, Masayoshi Oshikawa and Toshiyuki Shida, that settled in the Engaru area in 1887. The purpose of this group was to farm the uncultivated land in Hokkaido and to raise money for the establishment, 30 years later, of a private Christian University. This project collapsed, however, and the group dissolved after about 14 years.

This study is part of a series of historical studies on the pioneering spirit of Christian migration groups in Hokkaido. This paper aims to examine the causes of the “Hokkaido Doshikyoikukai” collapse in comparison with other Christian migration groups from the viewpoint of spiritual history and sociology of religion.

In summary, the author would like to point out that the collapse of the project resulted mainly from the isolation of the group from their faith (church). In the harsh natural conditions of Hokkaido, settlers needed both moral support and a sense of community solidarity. In similar Christian groups where the church offered such support, they were relatively successful. As a contributing factor to the failure of “Hokkaido Doshikyoikukai”, Shida, the local leader of this group, came to see himself less as a Christian, but more as a businessman or politician, and thus neglected the faith of the community as an empowering factor.

明治30年(1887)に現遠軽町に団体入植した「北海道同志教育会」(学田農場)は、キリスト教徒である押川方義、信太壽之によって企画され、未開地を開墾して得た収益を積み立てて、30年後にキリスト教主義の私立大学を設立することを目的としていた。しかし、この事業は失敗し、約14年後にこの会は解散した。

本稿は明治期に北海道に入植したキリスト教的移住団体に関する一連の開拓者精神史的研究の一環であり、その目的はこの団体の挫折の原因を、他の同種団体と比較しつつ、精神史的、宗教社会学的な観点から明らかにすることである。

結論として、この団体の挫折の最大の原因は、事業と信仰(教会)とが分離していたことにある。北海道の厳しい自然条件の中で開拓事業を進めるためには住民の内面的な支えや連帯感が必要であり、比較的成功した他の同種団体では教会がその役割を果たしていた。北海道同志教育会がこのような失敗に至った背景としては、現地での指導者であった信太壽之がキリスト者から事業家、政治家へと自らの生き方を変えていったことによって住民の信仰という内面的要素を軽視したことにある。

キーワード：北海道開拓、開拓者精神、キリスト教

はじめに

明治期に北海道開拓殖民という国策を背景として、数多くのさまざまな集団が新天地を求めて北海道に移住してきた。勿論、想像を超える過酷な北海道の気候風土、自然条件という現実と直面して、何らかの形で挫折した人々の数は圧倒的に多い。しかしその中でも幾多の苦難に耐え、なんとかこの北の大地に根を下ろした人々によって北海道が発展し、現在の各地域社会や文化の礎が築かれた。

ところで、これらの団体全てに共通する移住の動機や目的はまず旧郷里での経済的困窮であろう。家禄を失った旧士族や狭い農地で貧苦にあえぐ農民たちにとって、取りあえず北海道の広い土地と国・道庁による移住の奨励・保護政策は大きな魅力であった。しかし、それだけではなく、このような経済的利害状況の枠を超えた動機、特になんらかの宗教的な動機をも併せ持って入植してきた団体もあった。北海道開拓者精神史的観点からこの種の団体が注目されるのは、このような宗教的な要素が、厳しい自然環境に耐えうる精神的絆としての信仰ないしエートス(開拓実績と定着性に関わる要素)、古い日本の共同体の中心原理である「地縁」的・血縁的結合からの離脱のエネルギー(移住動機に関わる要素)、封建的なタテの人間関係と

は対照的なヨコの絆の強化による、より民主的なコミュニティ形成(コミュニティ、自治の質に関わる要素)、出身地や由来を異にする人々や異文化が混在する一つの地域(集落)に祭祀、礼拝などを媒介として形成されるコミュニティ・アイデンティティ(地域の連帯感に関わる要素)、礼拝所や教会を通じた青少年教育への貢献(地域のモラル醸成、知的環境づくりに関わる要素)、などの機能を持ち得ると考えられるからである。勿論これらは仮説的な指標であって、団体によってその適合度はさまざまに異なる。

こうした団体の中でキリスト教徒を中心に組織されたもの、あるいは何らかのキリスト教的意図を持って北海道に移住してきた団体としては、明治14年(1881)に現浦河町に入植した赤心社(組合教会もしくは会衆派)、明治24年(1891)に現今金町に入植したインマヌエル団体(組合教会+聖公会)、明治26年(1893)、現浦白町に入植した聖園農場(長老派)、明治30年(1897)に現北見市に入植した北光社(長老派)、そして同じく明治30年(1897)に現遠軽町に入植した北海道同志教育会(学田農場)(長老派)が挙げられる。

これらの団体の場合、上述の指標の観点から特に重要となるのは団体としての開拓事業と移住民の精神的支柱となった教会との関係のあり方である。これらの団体は移住後すぐになんらかの形で住民の定期的な集会や礼拝が行われ、数年後には教会が設立されて団体の開拓事業を内面から支えると同時に、団体の本来の目的が挫折した後も現在に至るまで存続して地域の発展と連帯にながしかの貢献を果たしているというのが通例である。赤心社では元浦河教会(組合教会)、インマヌエル団体では聖公会インマヌエル教会と利別教会(組合教会)、聖園農場では聖園教会(長老派)、北光社では北光教会(長老派)、そして学田農場では遠軽教会(長老派)がそのような役割を果たしている。ただし、それぞれの関係のあり方は異なっており、そのことが開拓の成果や地域への貢献のあり方の相違にも反映している。

これらのキリスト教的移住団体のうち最後の北海道同志教育会以外の団体については、筆者はすでに北海道開拓者精神史的な視野からの研究成果を発表している¹。本稿では、これら一連の研究の一環として、北海道同志教育会を取り上げ、『遠軽町百年史』(下記参照)などにおける、この団体に関するこれまでの通説に若干の修正・補完を加えるとともに、他の同種団体との比較に基いてその特性を明らかにしたい。

1 北海道同志教育会設立の経緯

(1) 史料・文献

北海道同志教育会および遠軽教会に関する直接的・間接的史料や文献は他の同種団体と比較してもきわめて少なく、しかも現在参照し得る一次史料はごくわずかで、ほとんどが二次史料である。その主なものを挙げると以下ようになる。

(一次史料)

信太壽之『旅行日誌』(以後『旅行日誌』と略記): 会の組織化と資本主の勧誘のため、明治28年6月19日に札幌を出発して8月15日、故郷の秋田に帰るまでの間に断片的に記録されたもの。全文が『遠軽町百年史』108～110頁に掲載されており、原史料は遠軽郷土資料館に保管されている。

信太壽之『学田地探検日記』(以後『探検日記』と略記): 雑記帳に走り書きした二様の日記で、全文が『遠軽町百年史』110頁に掲載されており、原史料は遠軽郷土資料館に保管されている。

信太壽之・西勝太郎『北海道同志教育会第一学田地探検報告書』(以後『第一学田地探検報告書』と略記): 明治29年10月付で探検の結果を公表したもの。全文が『遠軽町百年史』110～112頁に掲載されている。

北海道同志教育会『旨意書』・『会則』: 明治29年1月に公表されたもので、全文が『遠軽町百年史』104～108頁に掲載されており、原史料は遠軽郷土資料館に保管されている。

『北海道同志教育会第一学田地 資本主心得』、『北海道同志教育会第一農場小作規程』: 前者は明治30年、後者は明治31年に書かれたもので、全文が『遠軽町百年史』113～117頁に掲載されており、原史料は遠軽郷土資料館に保管されている。

『北海道同志教育会報告書』: 明治30年4月5日付で東北学院労働会発行の機関紙『芙蓉峰』誌上に発表されたもので、同年3月23日、東京都日本橋区呉服町柳屋方で行われた評議員会の内容を記録したもの。出席者は押川、信太の他、本田庸一、川崎芳之助であった。ここで役員を選任や会員募集の状況や、資本金募集の収支報告などが成されている。全文が『遠軽町百年史』119～121頁に掲載されている。

『開村二十五年史原稿』(大5): 学田二十五年祝賀記念祭総裁信太壽之の指示によって編纂されたものである。

が、印刷刊行はされなかった。当時の学田農場地域内の農家 11 名(農村側)と、付録として市街地居住者 36 名(市街側)の略伝が記載されており、現在は遠軽町郷土館に保管されている。

(二次史料)

『遠軽町史』(遠軽町, 昭 52): 北海道同志教育会に関するかなり詳細な記述があるが、それが依拠した史料については明確ではない。

『遠軽町百年史』(遠軽町, 平 10): 北海道同志教育会に関して上記をやや変更・補完したものが掲載されている。史料については上記と同様。

『遠軽町学田開拓親睦会 百回記念誌』(遠軽町学田開拓親睦会, 平 10): 上記『開村二十五年史原稿』を基にして印刷・刊行されたもの。

『遠軽日本基督教会五十年史』(日本基督教会遠軽教会, 昭 29): 昭和 19 年 4 月から当教会の牧師を務めた南義子氏がさまざまな史料や証言を基に記述したもの。根拠となった史料の記載はない。非売品。

大正 11 年 8 月 7 日付新聞『北海タイムス』特集記事「信太壽之氏の事業と氏の性格」(以後『北海タイムス 特集記事』と略記): 信太の略歴や業績を詳細に紹介したもの。根拠となった史料の記載はない。

その他、間接的な史料・文献の主なものとしては以下のものがある。

崎山信義著『ある自由民権運動者の生涯』(高知県文教協会, 昭 35)

『聖園教会史』(日本基督教会聖園教会, 1993)

『日本キリスト教会札幌北一条教会 100 年史 1890 - 1995』(以後『札幌北一条教会 100 年史』と略記)(札幌北一条教会歴史編纂委員会, 一麦出版社, 2000)

IG. ピアソン著, 小池他訳『六月の北見路 北辺のピアソン宣教師夫妻』(以後、『六月の北見路』と略記)(日本基督教会北見教会ピアソン文庫, 1985)

『開拓の群像 上』(北海道総務部行政資料室, 1696)

(2) 北海道同志教育会事業の概要

明治 29 年(1896) 1 月、「北海道同志教育會」が結成され、その『旨意書』及び『会則』が発表された²。それによれば、この組織の目的は、日本の近代化を促進させ、日本国と北海道の将来を担う青年に高度の教育を授ける私立大学を設立して独立自営の人材を養成しようというものであった。このため、まず会員を募って資金を集め、それを基に北海道の未開の植民地を借り受け、小作人を入れて学田を開拓し、そこから生ずる利益を年々積み上げることによって、三十年後に私立大学建設の目的を達しようとしたものであった。会長には押川方義³、副会長兼会計には本田庸一⁴、もう一人の会計は川崎芳之助、そして農場監督として信太壽之がなり、更に評議員として、片岡健吉⁵、小崎弘道⁶、海老名弾正⁷、仁平豊次、田村顕允、島田三郎⁸、江原素六⁹が名を連ねている。彼らは、北海道に移住した伊達亘理藩の家老で伊達教会の創立者である田村顕允を除けば、まさに日本キリスト教界の大御所ばかりである。

『会則』、『北海道同志教育會第一學田地 資本主心得』、『北海道同志教育會第一農場小作規程』からこの会の組織と財政的計画についてその概略を述べよう。この会は会員、資本主、小作人から構成され、会員は出資した額によって名誉会員、特別会員、通常会員に分けられた。資本主とは、借り受けた土地に資金を投入し、それぞれ小作人を入れて一戸分(5 町歩)以上を開墾する者とされ、予め一戸当り 貳百圓を会に出資する一方、小作人から年毎に定められた小作料を徴収するものとされた。この小作人の募集、管理、小作料の徴収と資本主への払い込みなどは会の事務所が行うことになっている。こうして当面は会費や資本主からの出資金を元に第二、第三の開墾地を増やしてゆき、9 年後からは 3000 町歩に広げた開墾地から直接小作料を徴収し、その利益を積み立てていって三十年後には大学を建設しようというのが大まかな計画であったと思われる。

この企画が動き出したのは前年の明治 28 年(1895) 夏からで、押川方義と信太壽之によってであった。それ以来、主として信太は資本家や移住者の勧誘に奔走した。そして移住候補地の視察探検の結果、移住学田地として上湧別原野(現遠軽町)が決定され、「湧別原野第四小作植民地」として解放された現在の遠軽町に含まれる土地約 4 万 8 千坪(1, 600 ヘクタール)¹⁰を借り受けた。その後聖園農場から北見・北光社を経て学田に先に入った野口芳太郎らによる小屋掛けなどの受け入れ準備が完了して、およそ 30 戸 120 人からなる新潟からの第一回移民団が学田に入植したのは明治 30 年(1897) 5 月 7 日であった。この日は遠軽

町開発の基礎をつくった歴史的な日とされている。

その後、第二回移民団として、明治31年(1898)に主として山形県から70戸ほどが入植、更に第三回移民(明治32年)が山形県から12~3戸、第四回移民(明治33年)として山形県から3~4戸が入植したがそれ以後は打ち切られた。その間、凶作や明治31年(1898)の大洪水などで移住した者の中から大量の脱落者が出たが、少数の残留者だけでなんとかもちこたえ、明治33年(1900)以降は薄荷栽培の成功で一時的に黄金期を迎えたが、信太の信部内農場その他の事業の失敗もあって事業不振となり、明治の末ころ(資料がないので不明)北海道教育同志会は解散した。解散後の学田農場はすべて信太個人の所有地になったと推測されている¹¹。

(3) 発案者とその時期

北海道同志教育会の最初の発案者が、東北学院の創始者で信太の恩師である押川方義と押川の推薦で当時札幌日本基督教会(北一条教会)の牧師であった信太壽之のどちらであったのかについては、諸史料・文献によって相違があり、確定することは難しい。まず、『北海タイムス特集記事』は信太壽之に関する特集記事で、明治28年(1895)、日清戦争(明治27年8月勃発)で国家の為に日々倒れる同胞を見ながら安閑として牧師の職にある自分を恥じた信太が、当時の北海道に最も欠けているものは教育事業であると考えてこの学田事業を発案し、恩師である押川の賛成を得たという書き方をしている¹²。ちなみにこの記事は信太に関する記述としては現存する最も古いものであるが、残念ながらそれが依拠した史料は不明である。全体として信太壽之の功績を讃える論調に貫かれており、また、詳細な点では『遠軽町史』と異なる点や不正確な記述が見られる。更に、『札幌北一条教会100年史』では、信太がこれを計画して、それに賛同した押川が会長を引き受けたと記述している¹³。更に『開拓の群像 上』では、信太の熱意に押川が感動し、進んで会長を引き受けたと記述されている¹⁴。ただし、これは上記北海タイムスの記事を典拠にしたものと思われる。

他方、『遠軽町百年史』では、その時期には触れていないが、押川の命を受けた信太が実質的な企画、実行を担当したと記述している¹⁵。また、藤一也著『押川方義—そのナショナリズムを背景として』では、明治28年(1895)10月に押川がこの事業を起こし、その実質的な企画者が信太であったと記述している¹⁶。これらの相矛盾する文献・史料からその発案者を断定することは困難であるが、少なくとも「旨意書」のきわめてナショナリスティックな論調はまさに押川のものである。従って、この発案の主導性は師である押川にあると見るのが妥当と思われる。

この企画が生まれた時期については、後述するように明治28年6月に信太が会の組織化と資本主勧誘のために四国方面に出かけていることから、明治28年初頭から遅くとも5月までの間であったと推定される。

(4) 動機

この種の開拓移住の動機としては通常政治的、経済的、宗教的の三要素が考えられる。「旨意書」の文面から見る限り、まずいわゆる愛国の情、つまり独立自営の人材を養成して国家永遠の大計を立てようとする政治的動機が優勢である。ただし、こうした政治的色彩の強い文面は同種移住団体の対外向けの公的文書には典型的に見られるものであり、必ずしもその真意が表明されているとは限らない。しかしいずれにせよ、押川方義が熱烈なナショナリストであり、その弟子である信太にもその影響が強く見られることは間違いないであろう。

経済的動機に関して言えば、押川や信太をはじめとするこの事業の主権者には、聖園農場の指導者、武市安哉に見られるような郷里の貧窮農民の救済という積極的動機¹⁷や赤心社に見られる士族授産という消極的動機¹⁸はほとんど見られない。問題は信太壽之に当初から事業家、経営者としての経済的野心がなかったかどうかであるが、それは不明である。ただ後述するように、少なくとも結果的には、学田に移ってからの信太の生き様は(政治への志向を強く持った)事業家そのものであったと言えるであろう。

宗教的動機についても不明な点が多い。ほとんどの史料・文献は信太らが最終目的とする私立大学がキリスト教主義の大学であることを当然の前提としている。しかし、旨意書を含めて少なくとも記録としてはそのような文言はどこにも見られない。ただ、赤心社など他のキリスト教的移住団体の規約書や主旨書など公的な文書にはキリスト教の語が出てこないことは通例であること、そしてこの事業の企画者・賛同者が全てキリスト教徒であること、また後世に伝えられた初期移住者の意識の中にそのような要素があったことが想

定できることなどから、この前提は正しいであろう。次節で述べるように、少なくともこの事業の発案と草創期には明確なキリスト教的理念があった。しかしそれでもなお、信太自身が最後まで真に“キリスト教主義”の道を信じていたとは断言できないように思われる。というのは、後述の野口芳太郎との不和に見られるように、その後の信太自身の言動からその痕跡がほとんど見られないからである。

こうしてみると、この事業の目的、動機として最も強調されるべきものは取りあえずは押川や信太の“教育への情熱”ということになるであろう。しかしこれだけでは未だ抽象的である。いったい彼らはどのような質の教育を考えていたのか、そのより具体的な像を考えると、事業開始前後の間接的状況証拠から一つの仮説が成立すると思われる。それを次節で紹介したい。

(5) 仮説：武市安哉の「開拓労働学校」構想の継承としての同志教育会(学田農場)

聖園農場の創設者でカリスマ的リーダーであった武市安哉は明治27年(1894)12月2日、青森発函館行き青函連絡船中で急死した。それは仙台で押川方義とかねてから共同で計画していた「開拓労働学校」の設立についてツメの会談をした直後のことであった¹⁹。この開拓労働学校というのは、夏は働き、冬は学問をするという自給自足の学校で、宗教と労働と学問を統一した教育機関であり、武市はそのための用地も聖園内に確保していた。勿論武市のこの構想については、聖園農場の幹部たち(その中には野口芳太郎も含まれる)や明治27年から説教のため聖園を訪れ、また明治28年(1895)1月(武市が死去して間もない時期)の第二回北海道冬季学校(岩見沢)に参加して²⁰ 聖園幹部と親交・交流を深めていた信太も知っていた。

ところで、聖園農場も北光社も共に武市や坂本直寛(北光社初代社長)ら高知(土佐)の自由民権運動家であると同時に高知教会のメンバーであるグループが母体となって企画・実践されたものであるが、その中でキー・マンの位置を占めていたのは北海道同志教育会の評議員の筆頭に名を連ねている片岡健吉であった。彼が残している『片岡健吉日記』によれば、武市が死去してわずか10日あまり後の12月14日に、後に同志教育会の会長、副会長になる押川方義と本田庸一が片岡宅(東京と思われる)を訪れ、更にその1週間後には同じく同志教育会の評議員になる島田三郎にも会っている。日記には会談の内容は書かれていないが、そのタイミングから考えて、この時に武市の遺志を継ぐ何らかの教育機関についての構想が話題になった可能性が否定できない。またそれから2ヵ月後の2月10日には片岡が押川を訪問しており、この時に更にその構想を煮詰めた可能性も考えられる。もしこの仮説が正しいとすれば、それから実際に信太が動き出すこの年の6月までの間に押川とその弟子信太との間で役員組織を含めた同志教育会の構想がほぼ固まっていたものと考えられる。

信太の『旅行日誌』によれば、明治28年6月19日、信太は同志教育会の組織化と資金集めのために札幌を出発した。28日には仙台日本基督教会で押川と会い、7月22日には高知で片岡と会い、更に翌23日には高知教会のメンバー約20名(片岡を含む)を集めて学田(同志教育会)のための集会を開いた。この集会は、それによって大いに触発された高知教会のメンバー、そして同時に東京で頻りに開かれていた土佐会のメンバーに北光社設立へのモチベーションを与えたのではないかというのが、他の状況とも考え合わせた筆者のもう一つの仮説である²²。その後信太は8月4日、東京で植村正久、島田三郎(評議員)、江原素六(評議員)と会って学田事業について相談している。

札幌に戻った信太は同年11月11日、札幌の山形屋旅館で武市の後継者となった聖園農場の土居勝郎(武市の娘婿)に会い、学田事業費として500円を借りる約束をした。この事実は押川・信太の事業に聖園の幹部たちも積極的に協力する姿勢を持っていたことを示している。このことは、聖園側にはこの事業が武市の遺志の継承と見なされていたと仮定すれば極めて合理的なものとして理解できるであろう。

一方、『片岡健吉日記』によれば、翌明治29年(1896)1月24日、信太が片岡宅を訪問し、その後片岡は小崎弘道とも連絡を取っているが、この前後に同志教育会の『旨意書・会則』が作成・公表されたと思われる。その間、2月6日には学田事業に500円を貸すことを約束したばかりの土居勝郎が高知を訪れて高知教会メンバーに北海道殖民談を語っているが²³、そこでは当然、学田事業と北光社設立を話題にしたに違いない。更に片岡は2月25日に高知から上京した土居(3月4日まで東京に滞在)に会い、3月3日には押川・信太に会っているが、この時、片岡、土居、押川、信太の間で学田事業について、特にその土地選定の問題について話し合われた可能性が高い。そして更に7日に北垣国道²⁴にあったのは、土地選定の助言を受

けるためと思われる。

学田の土地選定は明治 28(1895)年末から 29 年秋にかけて信太を中心に行われた。『旅行日誌』によれば、信太は 28 年 11 月 13 日に天塩に行き、増毛を視察した。彼が天塩に行ったのは、恐らくその年の秋に、北光社設立の土地視察のために片岡からの依頼で聖園の前田駒次がすでに天塩を視察し²⁵、有力な候補地になっていたためと思われる。ここにも片岡—聖園を軸にした同志教育会と北光社の関連性がうかがわれる。その後明治 29 年(1896)の夏から秋にかけて湧別原野の探検が行われ、明治 29 年 10 月付で『第一学田地探検報告書』が信太壽之、西勝太郎²⁶の連名で出されており、そこで北見国紋別郡上湧別原野が適地であることが報告された。

ところで、『遠軽町史』及び『遠軽町百年史』によれば、野口芳太郎の妻ハルの証言から、この探検には信太、西の他に聖園から野口芳太郎と土居勝郎(途中から浦臼に引き返した)が同行している²⁷。この事実はきわめて興味深い。何故なら、これとほぼ同じ時期に聖園の前田駒次が高知から来た坂本直寛、澤本楠弥とともに北光社の土地選定のため北見、クネネツ原野への視察旅行に出かけている²⁸からである。これだけの幹部が一度に聖園農場を留守にしたということは、この二つの探検が聖園農場という組織を挙げて、しかも一貫した計画のもとに(手分けして)行われたものであり、また、このことが武市の遺志を継ぐ聖園農場にとってきわめて重要な事柄であったと考えなければ理解できないであろう。更にこのような同志教育会(学田農場)の聖園農場及び北光社との密接な関連性を示しているのは、なんとといっても当初農業事務員として学田に入り、その後郵便局長を勤めながら遠軽教会の設立に中心的役割を果たした野口芳太郎の存在である。彼は武市安哉の思想に共鳴して聖園農場の幹部となって活躍した後、明治 29 年秋から冬にかけてクネネツ原野で翌年の北光社移住民の受け入れ準備作業に従事した後、翌年 3 月には学田農場の移住民受け入れ準備のために学田ですでに活動していたのである²⁹。この事実もまた北光社及び学田農場設立に際しての聖園農場の関与を示すものである。『遠軽町史』をはじめとする同志教育会(学田農場)に関するこれまでの史的叙述や言及には、聖園農場や北光社とのこのような密接な関連性の認知や指摘は全く欠如している³⁰。

(6) 事業の挫折とその原因

キリスト教的開拓移住団体の中で、曲がりなりにもその当初の目的を果たし、長く存続したのは赤心社のみであり³¹、インマヌエル団体は 4 年後には早くもキリスト教理想村という当初の目的を実質的に放棄せざるを得なかった。また聖園農場は 15 年、北光社も 16 年で組織的としては解体した。そしてこの北海道同志教育会事業もまた開始後ほぼ 14 年で挫折、解散した。これらの結果に共通する原因の第一は、なんとといっても北海道の過酷な気候による不作や特に明治 31(1898)年に北海道各地を襲った大洪水などの災害によるメンバーの大量脱落である。

しかし、この学田農場の場合、脱落者の比率が飛び抜けて多いことが特徴的である。『遠軽町百年史』によれば、第一回入植者 30 戸の中で残ったものは 7 戸のみであった。その理由は、天候不順による不作の他に、約束違反、つまり、会の資本主が思うように集まらなかったために移住時の約束(小作人一戸に対して壱百圓を貸与することなど)に反して十分な支給ができなかったことにあるという³²。この点ではこの事業の財政計画の杜撰さもまた挫折の原因として指摘できるであろう。三十年というあまりに長大な計画もさることながら、会員や資本主の応募数予測などに甘さがあったと思われる。

更に、開拓事業あるいは地域の発展を左右する要素として、事業と教会を核にした信仰生活の状況が挙げられる。この団体の場合、他の同種団体に比較しても、移住民の間での目的意識の共有や信仰などの内面的絆、精神的連帯という点ではきわめて弱かったと思われる。その点については次章で考察したい。

2 遠軽教会設立の経緯と学田事業との関係

(1) 学田農場における信仰生活

すでに述べたように、キリスト教的移住団体の場合、移住後の早い時期から信者たちの会合が持たれ、やがて教会が建設されて、過酷な条件の中での開拓事業を内面から支えるという環境が形成されるというのが通例であった。明治 14 年(1881)に現浦河町に入植した浦河・赤心社の場合、その趣意書や同盟規則の中には日曜集会への出席を義務付けていること以外にはキリスト教的な意図は全く盛り込まれておらず、しかも一貫して会社経営は移住民の内面的生活としての教会とは形式的に分離されていた。この点では北海道同

志教育会と共通点をもっていると言えよう。しかし他方、実際に移住してきた者も含めて赤心社の幹部のほとんどがキリスト教徒であり、一般移住者の中にもかなりのキリスト教徒がいた。そして移住の当初から日曜日午前の集会は厳守され、そこでキリスト教講話や修養談がなされていた。また会社から与えられた草小屋で日曜日には安息日学校が開かれていた。そして入植から4年後の明治18年(1885)に学校兼会堂が建てられ、翌年には浦河公会が設立されている³³。移住者の全員がキリスト教徒であった今金・インマヌエル団体の場合は、最初からキリスト教徒の村を作ろうという目的があったこともあり、移住当初から組合教会派、聖公会派が共同で毎日曜日の集会を持った。移住3年後の明治29年(1895)に聖公会派が、そして明治31年(1897)には組合教会派がそれぞれの教会を建設した³⁴。浦臼・聖園農場でも最初から移住者の中にキリスト教徒が多く、リーダーの武市安哉の感化の下で移住の翌日から日曜の礼拝を欠かさず続け、1年後には第一次移住者全員がキリスト教徒になった。そして入植の翌明治27年(1893)には早くも教会(日本基督教聖園講義所)ができていた³⁵。北見・北光社の場合は、同志教育会と同様、幹部以外の一般移住者にキリスト教徒はきわめて少なかったこともあり、キリスト教的活動は停滞した。しかしそれでも幹部はみなキリスト教徒で、移民すると同時に草葺の小屋を作り礼拝したと伝えられている。最初の公式の礼拝が行われたのが入植4年後の明治33年(1900)、そして教会(伝道所)が設立されたのは入植7年後の明治37年(1904)であった³⁶。

さて、移住直後の学田農場における信仰生活はどうだったのであろうか。まず上記の諸団体とは異なって、移住者の中にキリスト教徒はほとんどいなかったと思われる。しかし、『札幌北一条教会100年史』によれば、「入植と同時にその有志と土地の信徒を中心に、信太は伝道集会を開いた。開発計画が破綻した後も、農場に残った人々に信太は聖書を語り、この人々が初穂となって、1906年に日本基督教会遠軽伝道教会が建設された。」³⁷と記述されている。更に、『北海道開拓功労者関係資料集録 上』によれば、「明治31年(1898)、信太は洪水のあと農場に残った人々を自宅に呼んで、キリストの福音を説く集会を続ける(これが明治36年3月創立の遠軽日本教会に発展)」³⁸と記述されている。勿論その典拠は不明であるが、常識的に考えるなら、彼が元は札幌北一条教会の牧師であったことや、特に洪水被害で多くの移住者が逃亡したり、退去した後の状況を考えると少なくとも彼が住民にキリストの福音を説く機会があったことは十分あり得ることである。

しかし他方、奇妙なことに、『遠軽日本基督教会五十年史』にはこのような事実が全く記録・報告されていないばかりか、この団体の信仰生活の分野における信太の存在は全く無視されている。例えばそこには次のような記述がある、「かゝる事情の下に開基当初より基督教的理想は掲げられていたにもかかわらず、入植者の悉くが信仰者であるという北海道開拓当時随所にみられた事情と遠軽の場合は異なり、政治的な要素を含むものであるだけに、第一義的なものが信仰に集注されなかったことは残念であった。しかし農場監督信太氏は東北學院出身であるところから、同窓の舊知に秋葉定藏氏あり、同氏は基督者であった。彼は信太氏の提唱する教育同志会の主旨を是として教育係として三十一年五月渡道したのであった。」³⁹この記述を読む限り、この『遠軽教会史』が依拠した遠軽教会関係者の間では、信太壽之が学田に来る直前まで札幌日本基督教会北一条教会の牧師であったことはおろか、彼がキリスト教徒であることすら認知されていないことがわかる。これは学田農場と遠軽教会に関連した全体的状況からしてきわめて奇妙なことと言わざるを得ない。

ここからわかることは、少なくとも、信太は遠軽教会の設立やその後の運営には一切関わっていないということである。明確な根拠はないが、その原因として想定しうることは、信太がこの事業を機会にキリスト者としての活動を事実上放棄したこと、またはなんらかの理由から教会とは意識的に距離を置いたことなどであろう。だとすれば、次節で論ずる信太と野口芳太郎との不和がその一つの背景になっていることが考えられる。

(2) 信太と野口の確執

『遠軽日本基督教会五十年史』では、信太と野口との間の確執について次のように述べられている、「移民に苦澁を與えた第一のものは約束の違反であった。移民の条情かくの如くである時、野口氏は信仰的理想と精神的基礎が農場から失われることを極力おそれたのであった。……かくて所信の相違から信太氏と袂を離れ農場事務主任を辭し、郵便局を設置、局長となる傍ら北見青年会なるものを設立した。又これが教育と信仰的発達に力を注ぎ、自宅を開放して傳道につとめ、平素は數名の信徒が交々奨励、感話をなし集會を續け

た。」⁴⁰

この記述のみでは、二人の確執の具体的な内容は明らかではない。しかし、全体的な記述の基調から推測できることは、信太の事業重視というスタンスに対して信仰（精神的基盤）を重視しようという野口の意向が合わなかったということであろう。学田農場に来た野口が描いていた理想は彼が以前にいた聖園農場のあり方だったのではなかろうか。聖園の武市安哉も北光社の坂本直寛も共に高知の自由民権運動家であり、その運動の挫折から転じて新天地、北海道に新たなキリスト教的理想郷建設の夢を抱いて移住してきた。しかし、結局は政治的活動への執着を棄て切れずに北光社を投げ出した坂本とは対照的に、衆議院議員という身分を捨てて北辺での開拓に身を投じた武市の思想は、政治的手法による民衆の救済をきっぱりと断念し、キリスト教教育による人間の内面からの救済に賭けようというものであった。ただし、伝道だけで農民たちの経済的窮乏を救うことはできない。そこで生活の基盤である土地と労働の上に築かれる生活と内面的信仰が一体となった共同体の建設を志した結果として生まれたのが聖園農場であった。短い期間であったが、信仰を最優先する武市の聖園での生き様は移住民に大きな感化を与え、聖園農場の枠を超えた影響力を北海道の各地に及ぼした。武市の遺志を継いだ前田駒次は北光社を発展させ、大久保虎吉が美深教会を作り、そしてその影響を受けた近藤直作が佐呂間教会を作った。更に武市の影響力は聖園からアメリカやブラジルへの移民を介して実に海外にまで及んでいる⁴¹。学田に来た野口芳太郎もまさにその一人であった。このような武市の感化を強く受けた野口にとって、学田における信太の事業優先というスタンスは受け入れがたかったのではないだろうか。こうして学田から去った野口は北見青年会を作り、それが母体となって明治37年（1904）に遠軽教会が設立されることになる。その間の二人の関係や信太の教会設立に対するスタンスがどうであったかを知るための史料はない。

（3）札幌日本基督教会（北一条教会）における信太壽之告訴問題

他方、北海道教育同志会事業を契機に信太の関心や信条に大きな変化（信仰・伝道から事業へ、宗教から政治へ）が起こったことを示唆する事例として、札幌北一条教会での信太壽之告訴問題がある。明治26年（1893）10月、日本基督教会札幌教会講義所の主任者として迎えられた信太は、翌明治27年（1894）、宣教師3名と押川方義によって按手を受け、日本基督教会の教師となった。更に翌明治28年（1895）10月には札幌日本基督教会建設式が行われ、信太壽之牧師の就職式も行われた。また彼は着任以来、地方の巡回伝道とともに、教会内においても講義所内に「書籍館」を設けるなど、多様な活動に取り組んでいた。ところが、明治29年（1896）8月17日付けで、突然信太から宮城中会に対して牧師辞職願が、また同日付で教師退職願が提出された。理由は「他に画策する事業の為」、「感じる所有之」とされていた。そしてこれと同時に、7名の札幌教会員より中会に対して信太壽之牧師に対する告訴がなされたのである。

この告訴は最終的には、押川を中心とする宮城中会の判断で「告訴」ではなく「報告書」として処理され、信太の教師退職が受理されることになったのであるが、告訴の理由については史料が残っていないために不明である。しかし、この間の信太の一連の行動は、その理由を容易に推測させ得るものであった。

彼が辞表を提出した年の前年、つまり、札幌日本基督教会建設式が行われ、信太壽之牧師の就職式が行われる前の明治28年（1895）夏頃、すでに彼の”変節“は始まっていた。このころまでにすでに「北海道同志教育会」設立を決意した信太は、広く全国に賛同者を募り、計画実現に奔走していたのである。すでに述べたように、彼は7月から8月にかけては高知に出かけて同志を募り、11月には土地選定のために天塩国の増毛を視察し、「北海道同志教育会趣意書」が発表された翌明治29年（1896）1月と同年3月には東京に出かけている。『札幌北一条教会100年史』によれば、この間、1月から6月までの礼拝出席者は平均75名で、信太が赴任した明治27年（1894）に比べて教勢は停滞したという⁴²。これでは牧師としての活動がおろそかになり、教会信徒から抗議が出るのも無理はないだろう。つまり、告訴の理由は、信太が北海道同志教育会事業にかかりっきりで教会運営をなおざりにしたことにあると考えられる。

こうして牧師としての宗教的活動を事実上放棄し、もっぱら政治的な関心からの事業に身を挺した信太にとって、学田における伝道や教会設立にはほとんど関心も意欲も持ち得なかったのではなかろうか。

（4）北見青年会

『遠軽日本基督教会五十年史』、『遠軽町史』に拠って、遠軽教会設立の経緯の概略を辿ってみよう。学田を

離れた野口芳太郎は、明治 32 年(1899)に禁酒北見青年会を結成し、明治 34 年(1901)には青年会館を作って、高等小学校程度の夜学を開設した。明治 37 年(1904)には会館が落成し、以後毎年 12 月から 4 月まで冬季学校を開き、毎土曜日討論会、談話会、講演会、農事研究を行って青年の知識開発や精神修養、また地域の文化の発展に貢献した。これはその後の遠軽教会の母体となった。またこの青年会の幹部もキリスト教徒主体で最初から後の遠軽教会との連続性が強いものであった。その後、これは学田農場創設そのものの趣旨に従って大正 6 年には北見キリスト教青年会と改称したが、それが陰に陽に遠軽教会のバックボーンとなった⁴³。こうした野口の活動は、まさにその師、武市安哉の理念を継承したものといえよう。

一方、大正 3(1914)年 3 月には、学田青年会が学田部落を区域として、北見青年会の下部組織から独立して組織された。この分離独立が北見青年会の本来的なキリスト教的性格とどのような関連があったかは不明である。しかし、確かなことはこの時点ですでに学田農場が決してキリスト教徒の主要な地盤ではなく、同時にまた、学田農場創設の趣旨が農場内ではもはや失われていたということであろう。

更に、大正 6 年(1917)1 月に北見キリスト教青年会に変わったのを契機に、その一部であった向遠軽青年団が独立組織となった。ちなみにこの会館の土地は信太壽之から寄付を受けている⁴⁴。このような一連の動きを見ると、遠軽教会を核にしたキリスト教的共同体の形成とは全く別次元のものとして、学田農場でもより地縁的な色彩の強い地域共同体の形成が進んでいったことがわかる。

(5) 遠軽教会設立

明治 37 年(1904)、野口芳太郎、秋葉定藏などが中心となって、上湧別屯田兵舎の一部を二十五圓で買い取り、それを青年会の隣に牧師館兼用の集会所として建てた。翌明治 38 年(1905)7 月にはピアソン宣教師の応援もあって、伝道所となった。更に明治 39 年(1906)には、ピアソンの斡旋により山下善之牧師(前伊達日本基督教会牧師)が招聘され、彼の積極的な伝道活動で着実に信者が増えていった。またこの間、中会部内教職の応援もあり、旭川、札幌、小樽方面から坂本直寛、星野又吉、貴山幸次郎、光小太郎などが来援した。経済的な面では、ミッションが援助し、例えば牧師謝礼は最初教会が十円、ミッションが五十円を負担し、それから徐々に教会の分担額を上げていき、自給独立をめざした。ピアソン宣教師も山下牧師のために惜しみなく私財を投資して援助したと言われている。

このようにして教勢が拡大するに従い、会堂建設の声が高まり、教会所有の土地に教会長老の小山田利七が郷里の山形県から移植した薄荷を三年間栽培して会堂建設費を捻出した。また、土地は現在の場所を佐竹宗五郎長老、秋葉定藏がその所有地を寄贈し、こうして明治 45 年(1912)春、遠軽市街地に会堂が完成した(野口芳太郎はその 2 年前に死去)。

ところで、遠軽教会の設立から関わった初期のメンバーはどのような人々であったのだろうか。『遠軽日本基督教会五十年史』では、教会設立から 10 年後(大正 2 年)までの教会員として野口芳太郎、秋葉定藏を含めて、40 名の名前が挙げられている(故人も含む)。ここで興味深いことは、このうち、学田農場に移民として入って来た者は次に挙げる 8 家族 13 人のみであるということである。即ち、山口助藏、山口ウシ、野口芳太郎、野口ハル、青木伊勢松、青木榮子、三澤恒助、秋葉定藏、秋葉イネ、佐竹宗五郎、佐竹ブン、清野寅次、小山田利七の諸氏である⁴⁵。これは、移住開始から 3 年間でのべ 70 余戸、およそ 500 人にのぼる学田移住者の総数から見て、またこの事業の企画者がキリスト教徒であり、その目的がキリスト教主義の大学設立であったことを考えると少なくて少ないと言わざるをえないだろう⁴⁶。

それでは、学田関係者以外の信者はどのような素性を持った人々であろうか。ここできわめて注目すべき事実がある。それはこの初期の信者の中に聖公会から転入してきたものがかなりいるということである。具体的には佐野次郎夫妻、山口助藏夫妻、野口芳太郎夫人ハル、新野尾トク、谷津清作夫妻、三澤恒助、奥山喜作の各氏が挙げられている⁴⁷。『遠軽日本基督教会五十年史』によれば、彼らは下湧別に本拠を置いて教派を超越して近隣地域(特に上湧別の屯田兵村)への伝道活動をしていた聖公会の教職、山中奈良吉の感化によって入信したものであり、その点で彼の超教派的伝道の功績を讃えている。しかし他の文献は、山中の伝道が必ずしも超教派的なものではなかったこと、そしてこの聖公会から遠軽教会(長老派)への転入は決して平穏な形で生まれたものではなかったことをうかがわせている。

『六月の北見路』に収録されている坂本直寛記述の「第 4 章 北見リバイバル」には次のような経緯が記述されている。湧別の聖公会信者たちと伝道師である山中奈良吉との間に何年もの間トラブルがあり、信者た

ちは教会に行くのをあきらめていた。そこに坂本が北見に来たという話を聞いて、ぜひ湧別の聖公会の教会で説教をしてもらいたいと伝道師に頼んだが、彼はこれを強く拒否したために、同師と信者間の感情は更に悪化した。信者たちは自分たちの伝道師に失望し、自分の教会を捨てて長老派教会へ加わりたいと思っていた。しかし、長老派教会の信者たちが、彼らの教会に戻り、教会を建て直すように説得した結果、多くの者は戻っていった。後でこのことを知った山中宣教師も自ら反省し、坂本と和解したという⁴⁸。この叙述にはいささか我田引水のきらいがないわけではないが、おおよそこのような状況があったことは十分理解できる。恐らくこのような事情を背景として、聖公会から遠軽教会への多数の転入者が生じたのであろう。他方でこの事例は、当時のキリスト教信者たちが一般的には教派性にはほとんど無頓着であったこと、そして他の地域でも見られるように、形の上では超教派的な伝道活動や異教派の連携・協力が見られるという当時の北海道特有の現象としても興味深い⁴⁹。

ともあれ、その後遠軽教会は山下善之牧師の熱心でかつ巧みな伝道活動などもあって順調に教勢を伸ばし、大正11年(1922)には北海道で始めて自給教会となった⁵⁰。この間この教会の発展に援助を惜しまなかったピアソンの記録によれば明治41年(1908)当時、北見の北光社と比べて遠軽教会にははるかに多くの信者がいることを報告している⁵¹。こうした遠軽教会の発展は、学田農場とは別に、この地域の文化とモラルの醸成に大きな貢献をなしたことは確かであろう。

さて、このような経緯や状況を全体的に見るとき、北海道教育同志会(学田農場)の事業と遠軽教会の設立・運営との関係はかなり希薄なものであると判断できるであろう。遠軽教会は学田住民よりもむしろ市街地住民を中心とした北見青年会がその母体であるといってもよい。その点では、移住開拓と教会とが密接な関係を保っていた他の団体、赤心社、インマヌエル、聖園農場、北光社とはかなり性格を異にしているといえよう。

3 おわりに

北海道同志教育会(学田農場)はキリスト教徒によって企画され、最終的にはキリスト教主義による私立大学の設立をめざした北海道への開拓移住団体であった。しかし、開拓者精神史的な観点から見て、移住後14年で解散したこの団体の実際の軌跡はキリスト教的団体とは程遠いものであった。その理由は実際の移住者の中にキリスト教徒がほとんどいなかったこと、また現地の最高指導者であり、かつては牧師であった信太壽之に移住者へのキリスト教的感化に対する意欲がほとんど見られなかったことにある。このことは、彼がこの事業を契機に自らの生き方をキリスト者から事業家へと変質させたことと関係しているであろう。確かに遠軽教会の基礎を築いたのは野口芳太郎や秋葉定藏など学田農場から出た少数のキリスト教徒であった。しかしこの教会を実質的に支えたのはむしろ学田農場の外から集まった信者たちであった。

この事業の企画から解散、そしてその後幾度かの失敗の後、道議会議員当選とその直後の死にいたるまでの信太壽之の生涯、人物像には謎が多い。なぜ突然牧師の職を捨てて事業家になったのか、なぜ遠軽教会の設立に関わらなかったのか、その間の彼の思想と行動を合理的に跡付けることは難しい。ただ言えることは、宗教者から事業家、そして最後は政治家へと変遷した彼の生涯は、まさにその師、押川方義とほぼ軌を一にしているということである⁵²。

しかし、それにもかかわらず、この北海道同志教育会が今の遠軽町開発の基礎を築き、この地域の発展に貢献したことは間違いない。それは本来の目的とは異なった、いわば副次的な結果としての貢献である。信太は学田事業の挫折の後も農業、特に薄荷栽培や米作の推進、マッチ製軸工場の設置、また鉄道(軽便鉄道湧別線、石北線)の敷設や駅の敷地の寄付など、事業家としての才覚を遺憾なく発揮してこの地域の発展に大きな貢献をなした⁵³。いま遠軽町のシンボル、瞰望岩頂上の開拓記念碑には彼の撰文が掲げられ、またその下の遠軽公園内には信太壽之翁の碑が建立されて、遠軽町は町の礎を築いた最大の功労者として彼を讃えている。

註

- 1 拙稿「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」(『旭川工業高等専門学校研究報文』第40号, 2003)、同「今金・インマヌエル移住団体におけるキリスト教的開拓者精神」(北海道基督教学会『基督教學』第39号, 2004)、同「天沼家所蔵文書と今金・インマヌエル団体北海道移住の経緯」—一次史料の解読による通説の修

正・補完の試み一(『旭川工業高等専門学校研究報文』第43号, 2006), 同「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」(『旭川工業高等専門学校研究報文』第39号, 2002), 同「北光社・坂本直寛のキリスト教的開拓者精神—北海道開拓者精神史におけるその特色と限界—」(『旭川工業高等専門学校研究報文』第37号, 2000)。

2 『遠軽町百年史』104～105頁に全文が掲載されている。その一部をここに抜粋しておく、

「・・・嗚呼今の人を教ふる者豈生襟三省して學道を講ぜざる可けんや抑も一國民を率ひて愛國義侠の民ならしむるも遠望樂天の人たらしむるも或はまた盲目獸情の者たらしむるも失望厭世の徒たらしむるも唯々教育の方針如何にあり故に聖賢深く之れを憂ひ蓋世の大器を以て政界の争野を避けて教育の險路に除歩し以て人倫の基を立てたり嗟呼教育なる哉教育なる哉社會の改良國民の教化は獨り寺院教會の能くする所にあらず有為の人物を養成して國家の根底を固め多能の技工を出して社會の形成を助け内鞏外美の文明國を造るは實に真正なる教育に在って存す・・・」

本道十一州沃野千里其中或は慈善事業の基本となり或は公共事業の資金となりたるものなきにあらずと雖も固より蒼海の一粟たるに過ぎず余輩北海の天地に俯仰し道民の將來を思ふ毎に其幾分を割き以て國家的事業に用ひんと欲したること久し今や漸く宿望の途に上らんとすと雖も不肖固より此大任を負ふに足らず偏に天下同志の諸彦に訴へ別紙會則の方法を以て原資七萬圓を募集し第一設計に依り先ず一千町歩の學田を拓き次で第二第三の設計を行ひ九年度を待つて三千町歩を得其小作料凡そ年三萬圓となるを以て十年度より十三年度までに原資金七萬圓を返却し十五年度に至て普通學校を起し歳入三萬圓の内二萬圓を其維持に充て他の壹萬圓を以て年々學田を増し歳入を加へ向後卅年を期して大學校と成し以て北海の天地と無窮に存せしめ道民千歳の灯臺たらしめんとす嗚呼蜉蝣の人生に悠久の事業を試む固より容易の事に非ず・・・」

3 ブラウン塾に学び, J.H. バラより受洗, 日本基督公会創立に寄与した。仙台に伝道, 明治19年(1886)に東北学院を創立, 後に院長となった。長老派教会の中心人物として北海道への布教にも大きな功績を残している。熱烈なナショナリストでもあり, 晩年には憲政会代議士となった。

4 日本メソジスト教会初代監督, 青山学院院長, 教育者。

5 高知の自由民権運動家で国会議員(衆議院議長), 同志社総長などを歴任。聖園農場, 北光社, 学田農場の全ての創立に関わっている。本稿2-(1)における論述を参照。

6 同志社社長, 日本組合基督教会会長, 牧師。

7 同志社総長, 思想家, 教育者。

8 政治家, ジャーナリスト。明治19年, 植村正久から受洗。

9 政治家, 教育家, 日本メソジスト教会日曜学校長。

10 『遠軽町史』(168頁)及び『遠軽町百年史』(113頁)に記述されている6名への貸付面積(坪数)を合計するところの数字になるが, なぜか, 前者では1, 315ヘクタール, 後者で約400万坪と記述されており, どちらも計算が合わない。更に、『開村二十五年史原稿』(1頁)や『北海タイムス特集記事』では約三千町歩(約3, 000ヘクタール)となっており, 大きな違いがある。

11 以上の概要に関する記述は『遠軽町史』(遠軽町, 昭52)及び『遠軽町百年史』(遠軽町, 平10)に拠っている。

12 大正11年8月7日付新聞『北海タイムス』特集記事「信太壽之氏の事業と氏の性格」。参考までに原文の一部を引用しておく。「二十八年日清戦争に同胞の日々國家の爲に殉るるを聞き安閑として牧師の職にあるを恥使命と確信する処に決死の覚悟を以て尽さんと欲す然るに当時北海道に最も欠くるものは教育事業なりしを以て此の欠点を補うことを絶対の使命と信じ依って私立大學を起さんとす然りと雖も資金を得るに道なし且つ先達の士多く學校を立つるに寄付に限る是私立學校に養るる者の独立心の乏しき所以なり若かず本道至る所に存する不毛の地を開き學田を造成し寄付に頼らずして私立大學校を設立し独立自營的の人物を養成せんに乃ら北海道同志教育会なるものを組織して自ら会長の任に当たり其の歩武を進む其の主旨を恩師押川先生に告げ賛成を得て故片岡健吉,・・・諸氏の同情により北見国紋別郡湧別原野湧別川の上流に於て農耕適地一千五百町歩下流にて牧畜適地同上計三千町を得て第一學田農場として左の各項に基づき學田造成事業に着手せり」。

13 『札幌北一条教会100年史』, 33頁。その史料の根拠は不明である。

14 『開拓の群像 上』, 174頁。

15 『遠軽町百年史』, 108頁。

16 藤一也著『押川方義—そのナショナリズムを背景として』(燦葉出版社, 1991), 148頁。ところで, 信太は明

- 治 28 年 6 月にはすでに資金集めの活動を始めていることから、10 月というのは誤りであろう。
- 17 拙稿「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」、61～62 頁参照。
 - 18 拙稿「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」、72～73 頁参照。
 - 19 『福音新報』第 196 号(明治 27 年 12 月 14 日付)。
 - 20 同上, 第 203 号(明治 28 年 2 月 1 日付)。
 - 21 『片岡健吉日記』(立志社創立百年記念出版委員会編, 1974), 145～151 頁。
 - 22 詳細については, 拙稿「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」, 73～76 頁参照。
 - 23 土居晴夫「安芸喜代香の明治 29 年日記」(『土佐史談』113, 114 号掲載)による。
 - 24 元高知県知事。明治 25 年(1892)から北海道庁長官で, 明治 29 年 4 月からは拓殖事務次官であった。
 - 25 『聖園教会史』, 43 頁。
 - 26 この人物についての詳細は不明である。『遠軽町百年史』, 110 頁では, 聖園から土居の配慮で同伴させた人物であろうと推測しているが, その根拠は明らかではない。いずれにせよ土地調査に関して専門的知識を持つ者である可能性が高い。
 - 27 『遠軽町史』, 168 頁, 『遠軽町百年史』, 110 頁。
 - 28 『坂本直寛・自伝』(土居晴夫編/口語訳, 燦葉出版社, 1988), 86 頁。なお, この時期については諸説あり, その点に関する考証については, 拙稿拙稿「北光社・坂本直寛のキリスト教的開拓者精神—北海道開拓者精神史におけるその特色と限界—」, 80～81 頁参照。
 - 29 『北見市史』上巻, 838 頁, 『遠軽町百年史』, 121 頁。
 - 30 『遠軽町史』171 頁では「北海道同志教育会と北光社は別につながりはないようである。」と記述されている。
 - 31 その理由については, 拙稿「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」79～80 頁参照。
 - 32 『遠軽町百年史』, 128～129 頁。
 - 33 拙稿「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」, 74 頁参照。
 - 34 拙稿「今金・インマヌエル移住団体におけるキリスト教的開拓者精神」, 4～5 頁参照。
 - 35 拙稿「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」, 68 頁参照。
 - 36 拙稿「北光社・坂本直寛のキリスト教的開拓者精神—北海道開拓者精神史におけるその特色と限界—」, 71 頁参照。
 - 37 『札幌北一条教会 100 年史』, 34 頁。
 - 38 『北海道開拓功労者関係資料集録 上』(北海道総務部行政史料室, 昭 46), 145～146 頁。
 - 39 『遠軽日本基督教会五十年史』, 6 頁。
 - 40 同上, 5～6 頁。
 - 41 これらの状況については, 拙稿「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」, 70～71 頁参照。
 - 42 『札幌北一条教会 100 年史』, 33 頁。
 - 43 『遠軽日本基督教会五十年史』, 8～9 頁。
 - 44 『遠軽町百年史』, 1172～1173 頁。
 - 45 『遠軽日本基督教会五十年史』, 24～27 頁。
 - 46 ただし, 他の史料によれば, 学田農場には熱心に伝道していたメソジスト 信者がいたことで, この地域には長老派や聖公会信者の他にかなりの数のメソジスト 信者がいたらしい。この信者層はその後救世軍遠軽小隊に吸収されていったようである。『遠軽町百年史』, 1091 頁, 『六月の北見路』, 197～198 頁参照。
 - 47 『遠軽日本基督教会五十年史』, 24～27 頁。
 - 48 『六月の北見路』, 172～174 頁, 181～184 頁。
 - 49 明治期の北海道におけるキリスト教伝道活動に見られる教派性の問題については別稿で論ずる予定である。
 - 50 『遠軽日本基督教会五十年史』, 31 頁。
 - 51 『六月の北見路』, 85 頁。
 - 52 宗教者から政治家へという類型は, キリスト教的開拓移住団体の他の多くの指導者たちにも共通した特徴である。北光社の初代から三代目までのリーダーであった坂本直寛, 澤本楠弥, 前田駒次, そして聖園農場の二代目

指導者であった土居勝郎らに当てはまる。そしてどの場合にも、彼らが政治活動に専心してゆく過程と平行して開拓事業の方は衰退していった。

53 その詳細については、『北海タイムス特集記事』、『遠軽町百年史』, 140～141頁, 145～149頁参照。